



なごやヘルスケア・アート
マネジメント推進プロジェクト

vol. **03**

ヘルスケアとアート
そのマネジメントを考える
BOOKLET



Chelsea and Westminster Hospital, Radiance 2019 Artist Adam Furman

英国のヘルスケアアート とマネジメント

2018・2019年度シンポジウムより

英国の医療アートディレクターの役割

Trystan Hawkins トリスタン・ホーキンス
Arts Director/Director of Patient Environment. CW+
CW+ アートディレクター / 療養環境ディレクター

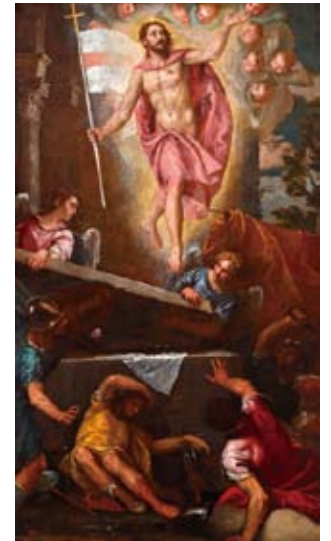
※ CW+ は Chelsea and Westminster Hospital のチャリティ財団



Trystan Hawkins is responsible for leading the vision for arts and design for CW+ in order to provide a first class environment for every one using the hospital. CW+ has won many awards for its work in providing outstanding healthcare environment and is a leading in this field. He has led numerous visual arts organisations, most recently the Royal Academy of Art (Bristol). He has a particular interest in the built environment and the impact of excellent design on the patient experience and clinical outcomes. He studied Design and Fine Art. トリスタン・ホーキンスは、病院を利用するすべての人にファーストクラスの環境を提供するため、CW+のアートとデザインの方針を主導する職務に就いています。CW+は、卓越したヘルスケア環境を提供することで多くの賞を受賞しており、この分野をリードしています。彼は多くの視覚芸術団体、最近では王立芸術アカデミー（ブリストル）を率いてきました。構築された環境とすぐれたデザインが患者の体験および臨床に及ぼす影響に特に興味を持っています。



Chelsea and Westminster Hospital のアトリウム



The Resurrection, Paolo Veronese, 1587

アーティストとして病院環境に関心

これから、私が過去 20 年ほど英国およびロンドンで行ってきた活動についてご紹介していきます。

私はアートとヘルスの領域におけるアートディレクターですが、英国に特別な資格があるわけではありません。ですので、まず私がどのような経歴の上でこの仕事に就くことになったのかをお話しします。私はアーティストです。ですが、とても優秀であればおそらく今もアーティストとして活動していたと思いますので、そこまで優れてはいなかったのかもしれませんが。

まず私はデザインや美術の基礎を学び学位を取りました。その後、ドイツで映像とインスタレーションの作品を作りました。

次に職歴です。まず私は学習障害のある方たちといっしょに活動しました。ロンドン全体で様々なアートを使った活動をしている団体で、その仕事の多くは、確立されたアートの場で働くことでした。その後、演劇や劇場などを使ってリスクのある人たちと紛争解決などに向けた取り組みにフォーカスをあてました。

次にディレクターとして、ケンブリッジにある Wysing Art という組織に移りました。ここでは様々な科学者やアーティストとコラボレーションし、新しいアートをつくっていました。

その1つに、心臓外科医と作家の ジョーダン・ペー

スマンとのアート活動がありました。その外科医に会うため病院を訪ねた際、建物に入ると独特のにおいや光によって気分が悪くなってしまったのを覚えています。その時、病院の環境をもっと改善できたらと思いました。同時期に新しいアートスタジオの建設も進めており、建築の重要性を理解していたため、病院環境をよりよい設計、デザインにできたらどれほど力強いだろうと、感じたのです。

続いて私はイングランド南西部プリマスのデリフォード病院に移りました。1400床もある大きな病院です。そこでの私の役割は、当時アートに関するプログラムが一切なかった病院で、アートとヘルスケアについての活動を進めることでした。巨大な新規開発を伴う建設事業もあり、8億もの予算がありました。またこの病院には医学部もあり、これから医者になる若い人たちにアートに参加してもらうことも私の仕事で、これはこの分野を広げる上で大変重要なことです。

そして現職に移る前の最後の仕事として、ブリストルにある王立芸術アカデミー（Royal Academy of Art）でディレクターを務めました。そこでの課題は古い歴史のある組織を現代化することでした。広く知られている団体ではなかったため、来場者を増やすことが私の使命でした。そして人気になりそうなプログラムを開催するなどし、最終的に訪問者の数を8倍に増やすことができました。

最もアートを必要とする時に

王立芸術アカデミー在職中にロンドンでの新しい仕事の誘いがありました。それは、毎日何千人もの人が利用する大きな病院でした。その環境で正しくアートを使うことで、人々に大きな変化をもたらしたり、あるいは様々な芸術に触れてもらう可能性があり、人々が最もアートを必要とする時に、力強い方法でアートを利用できることが魅力的でした。

ということで、Chelsea and Westminster Hospital の話に移ります。私の使命は、この建物にいるすべての人たちに最高の体験を提供することです。この病院は一般的な病院とは違って、光に溢れ空気感のよい病院です。1993年の竣工当時から、光と空気感を大切にしてきました。病院全体に光が溢れています。

この病院には膨大なアートコレクションがあります。建設プロセスの一部としてたくさんのアートが導入されました。現敷地に移る前からの歴史があり、イタリアの作家パオロ・ヴェロネーゼによる作品が最も

古く、チャペルに展示されています。このような作品が病院にあるのは非常にめずらしいことです。

全部で 2000 を超える作品が展示・收藏されていますが、公共のスペースのほか、臨床エリアにもアートがあることが大変重要です。とても有名な作家によるアートもあれば、新興の作家によるアートもあります。大切なのは、できるだけ幅広い作家のアートが收藏されていることです。

このような活動をする中で気づいたのですが、患者さん自身がアーティストであることもあります。下の画像は有名な作家アルバート・アーヴィンによるものです。彼は非常に重い病気を患っていた時にこの病院にしばしば通っていました。彼は病院に来るためにハリウッドロードという道を歩いたので、作品に「ハリウッド」と名付けました。

文化施設と協力し活動の幅を広げる

様々なパートナーシップも組んでおり、ボランティア



Hollywood, Albert Irvin, 1995

アや協力組織の方たちと一緒に活動しています。

前職の王立芸術アカデミーでは何百人かの人に訪問してもらおうと苦心していましたが、この病院では1日に何千人の方が訪れます。ですので、パートナーの方たちもこの病院との連携に価値を見出しています。つまり、新たな観客に作品を見せる機会になるかもしれないからです。

例えば、ロイヤルオペラハウスのチケットはとて高額ですが、私たちの協力組織として毎年500枚のチケットを提供してくれます。すると高給とはいえないスタッフや看護師も、1ポンドでロイヤルオペラハウスに鑑賞に行ける、すばらしい機会だと思います。

他にも英国でとても有名なヴィクトリア&アルバート美術館も、所蔵品を使ってこの病院の患者との活動をされています。このようなプログラムに関わる専門家がいる様々な団体と一緒に活動することは、我々の活動の幅を広げるよい方法でもあります。

外部との協力活動の例にもう1つ加えますと、この病院には自由な展示スペースがあります。そこで我々のパートナーが自らキュレーションをし企画展をしてくれます。私はその作品がこの病院にふさわしいかどうかの監督はしますが、展示会のキュレーションは協力組織のプロのキュレーターがするので、病院にとってもよい企画展を容易に行うことができます。

最近私たちはデジタルメディアに力を入れており、スクリーンを使った作品も展示しています。下の写真は英国で有名な映像作家のアイザック・ジュリアンの作品です。その場の特性を生かした作品となっており、企画展スペースに展示しています。

デジタル作品はキュレーションも容易ですし、スク

リーンを使っているのが簡単に作品を変更できる利点もあります。このような作品をアトリウムのスペースだけでなく、臨床エリアにも展示している点が重要なポイントです。

スタッフや患者を巻き込んで制作を

近ごろは病院に恒久的に所蔵する作品、例えば30年間所蔵するような作品を入れることはしておらず、今現在の環境に最もふさわしい作品を入れようとしています。というのも、病院は流動的な環境ですし、常に同じものを展示するスペースがあるわけではありません。3年後には建て替えもあるかもしれません。そこで柔軟さが必要となります。

ですので、Artist in residence という方法に注目しています。つまりアーティストが一定期間病院に滞在することで環境やそこで働くスタッフを理解し、さらには患者さんやそのご家族を知ることができ、より効果的な活動をすることができます。そのような周囲の人を巻き込むような形でアートを作り上げることができるのです。

一例がこの周産期センターです。アーティストのローリー・ヘイスティングは環境のあらゆる面、壁の表面や色、照明など様々なことに関与してくれました。設計家やデザイナー、そしてアーティストが連携して進めていくことがプロジェクトの重要な点でした。

そしてこのプロジェクトの一環として、版画作品も作ってくれました。この作品は患者を含む様々な方に販売をしており、ここに来た女性たちは安く購入することができます。これによって病院は収益を得るだけ

廊下に飾られた Monika Bravo による作品(右)
待合に飾られた Brian Eno による庭園の映像作品(下)



でなく、利用者にアートを購入する機会を提供することにもなり、大変興味深い結果となっています。

アートによる問題解決

次は救命センターについてです。ここは常に多忙で様々な問題も抱えており、開拓すべき新たなエリアでした。これは病院と密にやりとりをしながら取り組んだ最初の試みで、私たちは新しいスペースをつくり上げることで既存の問題を解決しようとしてきました。

ここでは12名のアーティストと協働しました。例えば左上の写真は英国ではよく知られているアーティスト、ブライアン・イーノによる作品です。彼は庭園の映像を作成しました。それは待合室に置いてあります。この映像は動くので、待合室にいる人たちは気を紛らわせることができます。

右上はアメリカ人のアーティスト、モニカ・ブラボの作品です。彼女の作品をベニスのピエナレで見ると興味を持ち、無理を承知でメールを送りましたがすぐ答えてくれました。

この経験から、こちらからお願いしなければ応えて

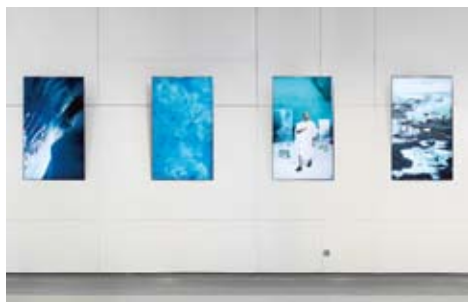
もらえないことが分かるかと思います。私たちは幸運なことにこれまでかなり有名な作家と協働することができましたし、彼らはオープンな気持ちで一緒に活動してくれたと思っています。そして予算もあまりかかっていません。芸術家たちはこうした活動を通して社会や病院に貢献したいと思っているからです。

下の2枚の写真は新興の作家による作品です。処置室にあり、痛みを伴う治療を受ける患者たちの気を紛らわす、とても実務的な機能があります。これに関するエビデンスはまた後ほど紹介します。

このプロジェクトはゴールがあるわけではなく、私たちはよく作り直したり、学んだりしています。こうした事業全体に関して、病院内の作品の設置や修復などの管理は我々のチームで行なっています。つまり病院の医療チームの仕事ではありません。このような働きも病院での事業では考慮すべき点なのではないでしょうか。

映画館もあります。長期入院の患者さん向けの施設で、ベッドを持ち込めます。友人や家族と一緒に、英国で公開されたばかりの最新の映画も鑑賞できます。

次頁の画像はアンディ・カウシルの作品です。小



Stones against diamonds, Isaac Julien, 2019



周産期センター, Laurie Hastings, 2014



処置室にあるライトボックス (左の画像は天井にある正方形のもの、右の画像は上部にある横長のもの), 2015-2016





Rhino, Andy Council, 2015

児科や子ども病院で活動をされており、この地域にあるランドマークなどをモチーフに、2頭のサイを描いてくれました。病院の中でアーティストと一緒に作り上げていく、よい事例だと思います。そしてこの作品はプリント版も作り、数量限定で販売しています。

窓のない空間に外の世界を投影

下の画像はリラックスデジタルと呼ばれるものです。非常にシンプルな景色が動画として提供され、60時間以上のコンテンツがあります。例えば船のある港や草原にいる羊など、リラックスできるようなプログラムを提供しています。待合室の中には窓がなく日の光が入らないところも多いので、外の世界を投影させる非常によい方法です。またとても安くすぐに設置ができますし、何かあっても簡単に交換ができます。

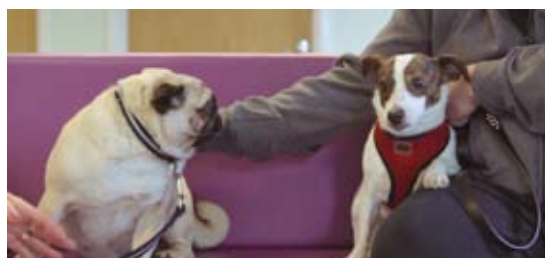
皆を笑顔に、できれば声をあげて笑ってほしい、そのためにはどうしたらいいだろうかと、私たちは日々考えています。病院の全てのエリアにはと言いませんが、そうしたことが役に立つ場があると思います。

痛みの軽減や経営面にプラスの効果

右上の動画はリラックスデジタルの一部で、動物病



リラックスデジタルのコンテンツの1つ



動物病院の待合室の様子を映したリラックスデジタル

院の待合室に次々と動物たちが来ている様子が映し出されます。The Zoo と呼ばれる救急室向けの作品もあり、子どもが嫌がる、もしくは痛みを伴う施術をする際に気を紛らわすために見てもらっています。

私たちはこれについてある研究を行いました。このスクリーンで映されていることで、こういった効果があるかお話しします。例えば、87%の人が痛みの軽減に役立ったと答えています。子どもの採血にかかる時間は7分ほどから約半分まで減りました。すると、その小児科の患者さんや医師にとっていいだけでなく、収益があがり経営面でもプラスになります。

多様なアーティストとの協働

様々なアーティストが私たちと協働している例をお見せします。85歳の作家マース・アーミテージは、様々なハンドプリントや、心臓外科病棟などに貼る壁紙を作っています。私たちは、色々なデジタルアートも広く収集していますが、実際の素材を用いた伝統的なアートももちろん大切にしています。マースは病院に来て年配の患者たちと一緒に作品の制作を行いました。彼女より若い人もいて、紙のデザインを考えて印刷したりしていました。

フランス人の作家アヌーク・マーシェは、ドローイ



Marthe Armitage



Anouk Mercier と彼女が描いた看護師のドローイング

ングをやっています。病院がアナログからデジタルへ移行する中で、実際のドローイングにも私たちは関心を寄せています。彼女は才能ある作家ですので、どのような作品になるかは分からなかったのですが、きっと素晴らしいものになると確信していました。

彼女はここで看護師の格好をしています。私も現場には実際に入院着で入ります。そうするとチームと仲良くなり、さらに患者さんから直接話を聞いたりして院内の状況を学びます。

病院の記録を調査している中で、彼女は1919年に撮影された写真を見つけました。その写真の中央に座っている男性は名前が下に書いてあるので誰だか分かりますが、周りの看護師は誰も名前が分かりません。アヌークはこの集合写真から女性たちを鉛筆で描いていきます。一人描くのにそれぞれ3日ほどかかりますが、そのような過程をへることで、彼女たちが一体どういう人だったか、さらには看護師としてどのような役割を果たしたかをリサーチしてくれました。

それから、毎日のようにワークショップを患者さんのために開催しています。主には病棟で行いますが、様々な形、アプローチのアートが採用されています。

患者さんが作った作品を、先程の企画展スペースに展示したりしています。すると、作者やその家族が作品を見に来たりするので、病棟での取り組みを知って



(左)ワークショップのひとコマ、(右)集中治療室でダンサーと踊る患者

もらえることとなります。

ダンサーたちとICU（集中治療室）で一緒に参加型のダンスをすることもあります。患者さんたちがどうすれば体を自分で動かせるかについても、様々な取り組みをしています。こういったアプローチを取ると、時に理学療法士が新しい療法を発見することにもつながります。これまではうまく動かせなかったけれど、ダンスを取り入れることによって新しい形で体を動かすことに成功したという例も出てきています。

それから動物を使った療法も取り入れ始めています。皆様ご存知と思いますが、動物を撫でたりすると、気分が良くなり血圧が下がるとされています。多くの犬は訪問者よりもずっと清潔であつたりしますので、感染症等の対策もきちんとしてした上で、こうした療法を進めています。

音楽なども取り入れています。病棟では、例えば患者さんがそれぞれのベッドで音を出しながら合奏するような形で、音楽を取り入れる場合もあります。私たちのチームで月曜から金曜まで毎日こうした活動をしています。プロのパフォーマーが来ることもあり、ダンサーが病棟をまわって踊ってくれたりします。

研究活動とエビデンス

私はこれまで、何年もこうした活動による影響について調べてきました。このアートとヘルスについての価値を計ることはとても重要です。ヘルスケアアートにあまり関心の無い人にはエビデンスベースで、つまり証拠や根拠をもとに話さなくてはなりません。次のものは、これまで分かってきた効果の一例です。

- **音楽とアートの存在：陣痛時間を2.1時間短縮**
- **化学療法に関する患者への効果：**
 - ストレスホルモンであるコルチゾールが32%減少
 - 抑うつ感が31%減少
 - 視覚アートの存在する場において不安感が18%減少
- **手術を受ける患者への効果：**
 - 1kg当たり0.83mgの麻酔の減少
 - コルチゾールが48%低減
 - 平均在院日数が1日短縮

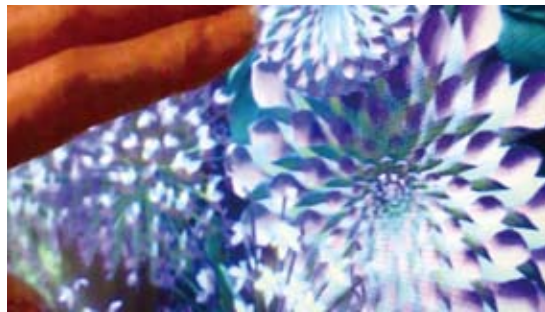
研究活動として、現在は4人の博士課程の学生が私の下で動いています。例えばある学生はスタッフと患者さんのやりとりから、病棟の建築的なレイアウトがケアとコミュニケーションにどう影響するのかを観察しています。目線の動きを追う研究をしている学生もいます。例えばせん妄という状態になると、死亡率が4倍に跳ね上がるといわれており、特定の視線の動きがそのせん妄の予兆になるのではという仮定のもと、研究をしています。その視線の動きが出た際に早期に対処し、急変時に備えるための調査です。

テクノロジーの活用

またセンサーの活用もしています。様々なテクノロジーの発達によりとても簡単にできるようになりました。例えば私の携帯電話は、私がどれだけ寝たか、1日に何歩歩いたかを自動で測ってくれます。そうした技術を病院環境でどう展開していくか、また集めたデータをどう活用するかがこれからの課題です。

これはとてもシンプルなフォーマットで、悲しい顔から幸せな顔まで4つあり、患者さんがそれぞれの質問に対し自分がどんな気持ちにあるか答えてもらいます。とても素早く簡単に、インタラクティブな形でデータを収集できるようになっています。

それからバーチャルリアリティ（VR）をどのように病院環境で活用していくかについて。その技術を生か



手で触れると変化するバーチャルな植物ディスプレイ

してどう展開していくか、実装を試みるプロジェクトに「未来の病院」があり、VRのヘッドセットに映し出すコンテンツを委託して作ってもらっています。

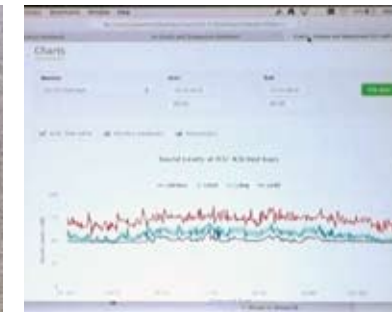
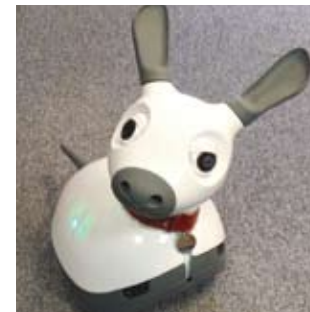
例えばそのパートナーの1つに大英博物館があり、患者さんがその展示物を観たいとか、もしくはテムズ川を下りたいという場合に、そのような仮想体験ができるコンテンツを開発しています。

またカテーテルの処置のように痛みを伴う医療行為の際、痛み止めなどの投薬量を減らす代わりに、VRを選ぶこともでき、そうした患者たちのために、40分程の体験コンテンツを提供してもらっています。

「バイオフィリア (Biophilia)」という概念があり、人は植物を好む傾向があることから、植物や風景はヒーリングの環境にはとても良いものだ、だいぶ前からよく知られています。ですので、例えばアトリウムにはちょっとした庭があります。現在のところ植物は病棟持ち込みが禁止されているので、残念ながら生の花をベッドサイドに置くことはできません。ですので、どうにかして人工的な、バーチャルな植物を持ち込めないかと、韓国のロボティクスラボと協働し研究を進めています。上の画像は本物の植物ではないですが、実際の手の動きに合わせて、画像の植物が変化するようなインタラクティブな機能のある作品です。

このデジタルの分野は、まだ試行的な領域にとどまっています。例えばこの7ヶ月の間にVRの新しいヘッドセットが次々に出るといった技術的な問題もあります。メインとなるのは伝統的なアプローチによるアートでそれらの効果も立証されていますが、テクノロジーの分野は大変興味深く、積極的に進めています。

それからコンパニオンとしてのロボットにも大きな進展が見られました。日本で発明され大きな成功を取



コンパニオンロボットのミロ。目がカメラになっている／音環境をモニタリングするシステム／スタッフと実寸大の段ボールを使って空間の検討

めたパロは、私たちの病院でも好評でした。その改良版、ミロも導入しました。ミロは目の部分がカメラになっていて、患者さんの心拍数や呼吸の状態、悲しい表情をしていないか等を観察しデータを記録しています。他にも病棟でただ踊ったり、小児科の待合室で子どもたちと触れ合ったりしてよい結果が出ています。

病院内ではいたるところで音楽をかけ、それを活用しています。パルス・ミュージック (Pulse Music) というプロジェクトも推進中です。私たちの選ぶ音楽が全ての方に好まれるわけではないので、患者さんに好きな音楽を持ってきてもらいそれを独自のソフトウェアにかけてその患者さん用に提供します。例えば患者さんが持ってきた音楽が1分間に110拍であった場合、鎮静効果は見込めないのですが、そのソフトで速さを変え70拍くらいに落とすことで、簡単な方法で鎮静効果が期待できるようになります。

ICUの音環境も快適に

ICUの改修事業も進行中です。ここは、先ほど述べた様々なプロジェクトを実験するための環境として非常に重要でした。

例えば、私に関心を持つものの1つが睡眠です。睡眠は人々の福祉にとっても大きな影響を持ちます。ただ病院は現在、色々な音が飛び交っており、その騒音は患者さんだけでなくスタッフにとっても好ましいものではありません。ある研究によれば一定のデシベルを超えるとミス率が高まることが分かっています。この騒音環境を最適化する方法を現在研究中で、それを反映させて改修したいと考えています。

朝から夜までの音の状態を、テクノロジーで感知し

各ユニットの状態をモニタリングするシステムもあります。この会場にはネット回線がないのでライブで見せすることはできませんが、この美術館に来てからダウンロードしたデータをお見せします。実際は5秒ごとに更新されます。この図表に出ているのはノイズレベルで、WHOの勧告によるとICUは35デシベル以下に収めることが理想とされていますが、現状はそれを大きく超えた状況にあります。

プロジェクトはすべて病院スタッフが関わります。ICUの改修では事前にワークショップを開き、事前協議などが開かれました。また実寸大の試作を段ボールなどで作り、空間的な検討も行いました。アーティストやデザイナーも最初から関わってもらっています。

パートナーシップのさらなる開拓を

私たちの財源は、全て慈善事業からの資金でまかなっており、病院は出していません。自前で集めたチャリティーの財源で行なっています。こうした事業を進めていく中で、私たちが大事にしていることは、1つ大きなアイデアを持ち、それを基に意欲的に推し進めていくこと。さらなるべく幅広いステークホルダーの賛同を仰ぐことです。

今後の展望として、まず新しいパートナーシップの開拓をしていくこと、できれば日本の皆様ともパートナーシップを組みたいと考えています。それからこれまで私たちが出してきた成果を、他の病院と共有すること。例えばデジタルコンテンツなどを無料で提供し、その認知を広めていきたいと思っています。

今後さらに皆様との話し合いを続けていければ幸いです。ありがとうございます。



インタラクティブに患者さんの気持ちを収集するフォーマットを活用

英国における医療とアート

Damian Hebron ダミアン・ヘブロン
Programme Manager in Nesta's Health Lab
ネスタ財団 健康研究所 プログラムマネージャー



Damian Hebron is Programme Manager in Nesta's Health Lab, leading on the organization's work in arts and health as well as managing the Social Movements for Health programme. He was Director of London Arts in Health Forum (LAHF) – a leading UK organization. He has worked in the arts for over 20 years, originally focusing on community theatre and participatory arts. He has a degree in Social and Political Sciences from Cambridge University (Clare College).

ダミアン・ヘブロンは、ネスタ財団 健康研究所のプログラムマネージャーとして、アートと健康に関する組織の業務を指揮するとともに、「健康のための社会運動」プログラムにも携わっています。かつては英国の代表的な団体である London Arts in Health Forum(LAHF)のディレクターを務めていました。20年以上アートに携わっていますが、もともとはコミュニティシアターや参加型芸術に焦点を当てていました。ケンブリッジ大学で社会政治学の学位を取得（クレア・カレッジ）。

「アートは接着剤のようなもの」

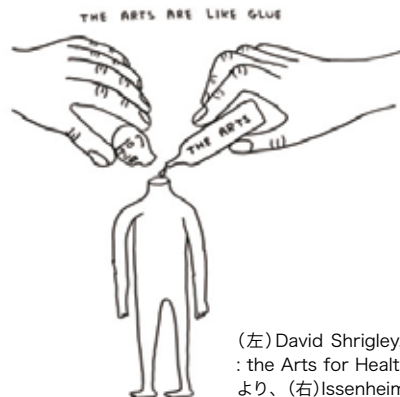
私はアートと健康に20年ほど携わってきました。今日は、私が病院で働いた経験のほか、アートと健康について幅広い事柄を紹介したいと思います。

まず最初に下の絵をご覧ください。デイビット・シュリグリーというアーティストが描いた絵で、2017年に英国の芸術と福祉を考える超党派の議員グループによってまとめられたレポートの中にあるものです。ここに「アートは接着剤のようなものだ」と書かれています。皆様が賛同されるかは分かりませんが、アートは接着剤のように使えるのではないかと、そうすることで社会はどうかについてお話しします。

私は日本文化の1つ「金継ぎ」について、詳しくは知りませんが、ものの弱ささえ賞賛するものと理解しています。それは、美しさを見出す方法は1つだけ

はなく、何かを修理、修復することによっても美を見せると教えています。金継ぎをした陶器は、修復する過程でより美しくなっています。

ちょっと恐ろしい画像ですが、下の絵は画家マティアス・グルネヴァルトによる作品です。イセンハイムの祭壇画の一部で、500年前に修道院から依頼されました。祭壇画ですので、複数の作品がまとまって1つの作品になっており、年間を通して異なるシーンを展示できます。この修道士たちは施療院を営んでいました。そこはフランス中心部にあり、麦角中毒という病気の人たちをケアしていました。巡礼者たちはヨーロッパ中をまわっており、菌が繁殖した穀物で作られたパンを食べ、その菌が中毒を引き起こしました。体がただれ、お腹が膨らみ、そして恐ろしい幻覚を見、精神症状も出ていました。最後には皆亡くなりました。



(左) David Shrigley, 『Creative-Health: the Arts for Health and Wellbeing』より、(右) Issenheim の祭壇画の一部



ではなぜ修道士たちは、患者とよく似た場面を含む作品を依頼したのでしょうか？ なぜこのような作品を施療院に飾ろうとしたのでしょうか？ 私が思うに、その患者、巡礼者たちが、自分たちの苦しみをイエス・キリスト、聖人の苦しみと重ね合わせようとしたのではないのでしょうか。そして自らの恐ろしい経験が、何らかの形でキリストの恐ろしい経験につながっていると。自分たちの苦しみは一時のもので、そこを超えてどこかに到達できると、そう考えたかったのではないのでしょうか。この作品があることで、自らを振り返るとともに、今どんな状況にいるのか、今とその次の人生において、他に何ができるだろうかと考える手助けになったのだと思います。

もう一枚、恐い画像です。左下の写真は私が子どものころ近くにあった英国の病院です。私が8歳の時、母が重い病気にかかりこの病院で治療を受けていました。私はここに行ったことをとても鮮明に覚えています。変な臭いがして、照明が非常に眩しく、寒かったです。また、がらんとした空虚を感じました。まだ幼い少年でしたので、自分の不安をがらんとした白い壁に投影したのを覚えています。

アートを加えることで適切な医療を

フローレンス・ナイチンゲールは、英国人の看護師で1860年代ロシアとの戦争中に活動しました。彼女は『看護覚え書』というとても影響力のある本を書きました。その中で彼女は非常に興味深い内容、例えば「病院を衛生的に保ち、窓を開けて、人々が新鮮な空気を吸えるようにしなさい」と書いています。また次のようにも書いています。「形や色、光がどのよ

うに影響するのはよく分からないが、実際に身体に影響があることは分かっている」。

話はさらに過去にさかのぼりますが、下の画像は古代ギリシャの医学の守護神、アスクレピオスです。シンボルは蛇の巻き付いた杖で、それは現在、WHO（世界保健機関）のマークになっています。ギリシャ人たちは、医学は彼の5人の娘によって象徴化できると考えました。1人目ヒュギエアは健康・清潔・衛生の女神です。2人目がイアソ、快復の女神。3人目がアケソ、治癒の女神。4人目がアグレアで、美・輝き・壮麗の女神です。そして、この4女神がそろわなければ、5人目の女神パナケイアが象徴する万能薬は作れません。つまり、快復や治癒、清潔、美を組み合わせなければ万能薬は作れないというわけです。

そして現代の医学では、時として「美」の側面は忘れがちだと思います。衛生や清潔、治療には注力しますが、美や壮麗については忘れがちかもしれません。私はそれらの要素にアートを加えることで、適切な医療を取り戻せると主張したいのです。

設置や管理もアートマネージャーの仕事

ケンブリッジ大学病院での私の活動を紹介します。仕事を始めたのが約20年前になります。先ほど話したように8歳から何度も病院にお見舞いに行き、病院には何かもつとすべきことがあるのではと考えていたためです。もともと私は劇場で働いていましたが、常に病院やヘルスケアには関心がありました。

ケンブリッジでもアートプログラムを開発しました。予算はかなり限られていました。トリスタンの話と重複しないよう、活動で直面した実践的な課題につ



かつての Gloucestershire Royal Hospital



- Hygieia (goddess of health, cleanliness, and sanitation)
- Iaso (the goddess of recuperation from illness)
- Aceso (the goddess of the healing process)
- Aglaea (the goddess of beauty, splendor, glory, magnificence, and adornment)
- Panacea (the goddess of universal remedy)

ギリシャ医学の守護神 Asclepius と娘の4女神



輪が運動して動く彫刻「アスクレピオン」、作者は Ivan Back



ご遺族の依頼で設置したアート作品



Kate Munro による野生の花を壁や天井にあしらった作品



250周年を記念して設けられた博物館エリア

いてお話しします。

上の画像は動く彫刻です。名前はアスクレピオンと言います、先ほどのギリシャの医学の神から名づけられました。外の輪が動くと、内側が逆方向に動きます。約7mの高さがあり、アトリウムの天井からつり下げられています。これを設置した時、火災報知器が鳴り続けました。この建物の設計デザインにはかなり長く関わっていたのに、誰もそこに火災報知器のセンサーがあるとは教えてくれなかったのです。煙の検知器かと思っていました、動きに反応するセンサーでした。そのためこの彫刻は一度外して1m低いところに設置しなおしました。

下の画像はメインのエレベーターロビーにある作品です。非常に狭くせわしいスペースにあります。設置した際、熱がこもり自動的に電源が切れてしまうことがありました。そのため一度取り外し、中にファンを入れて設置し直しました。こうしたことも病院のアートマネージャーの仕事なのです。

右上の画像は窓に設置した作品です。きっかけは悲しみの中にあるご遺族から、亡くなった方のためにアートを設置してほしいという要望でした。しかし、特定の患者のためだけに彫刻や肖像を置くことはできません。病院は亡くなった方のためではなく、生きて

いる患者のための施設ですから。ですので、アーティストにご遺族と話をしてもらい、亡くなった方が熱中していたことについて聞くことにしました。そして、軽妙で遊び心があり、記念的な作品を仕上げました。亡くなった方について作品横の説明で触れられていますが、この作品から感じるのは、楽しさや生き生きとした印象です。

下の画像は赤ちゃんとお母さん向けの産科エリアにある作品です。残念ながら病院で出産後、赤ちゃんと一緒に退院できない母親もいます。私たちは赤ちゃんのことで理想を押しつけることが無いよう、非常に慎重にならなければいけません。ですから全て抽象的な作品になっています。アーティストはここで母親たちと長い間、話をします。そして会話から出てきた言葉を使って作品を作ります。例えば「流れ」や「道のり」、「動き」、「波」といった言葉が出てきます。これらは度々出てくるので、この病院で過ごす人たちが求めるテーマなのです。赤ちゃんを産むために病院に来た母親だけでなく、病気で来ている患者も同様です。

右頁上の画像もまた動きのあるアート作品です。人がよく行き交う廊下にあります。押し花を使った作品で、天井から壁に設置されています。天井にも展示するこの試みがなぜ良いかというと、廊下をベッドに横

たわったまま移動する患者もいるからです。天井は多くのタイルからなっていて、補修のために照明や電気の手が届くようにする必要があり、こうしたところに作品を準備するにはかなり時間がかかります。

内外のさまざまな人との協力や相談

また病院の中では、地元のコミュニティグループの方でも多くの活動をしており、地元の学校の子もたちとの活動もあります。下の写真に写っている子たちも皆8歳です。私たちは、子どもたちがこの病院は自分たちのもので、病院に来るのは楽しいことなのだ、と思ってほしくて行いました。

また他には、学校のグループが来て患者のために歌ったり、展示会をすることもやってきました。しかしこの地域の中で例えばインフルエンザなどが流行ったりすると、病院に来てもらうことが難しくなります。

先ほどトリスタンが、臨床エリアにもアートを入れることが重要と話していましたが、そのためには感染症対策を真剣に取り組まねばなりません。それによって機会が限られ、使うことのできる材料にも制約がでてきます。

数年前私たちの病院は250周年を迎え、病院内に

博物館を設けました。私は火災監督者と設置に関してかなり話し合いをしました。というのも、その博物館エリアで人々が面白いものを見つけ立ち止まり廊下の交通を妨げると、火災リスクになると。ですので「つまらないから大丈夫だ、立ち止まって見る人なんて絶対にいないから」と説得したら、大丈夫でした。

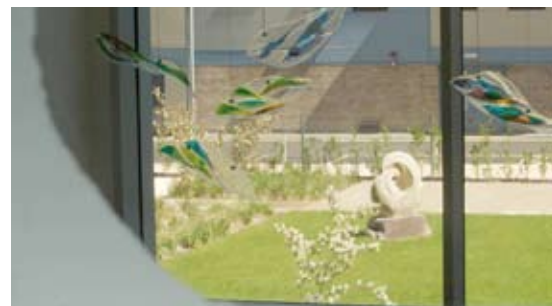
さまざまな患者にインタビューをし、幸福についても話を聞きました。話を聞いたら、その人の写真と話を合わせて貼り出しました（画像下）。こうした場合プライバシーへの配慮が重要です。そういった写真で自分が見られるのを嫌がる人もいますから。ですので、その話を共有するためのクリエイティブな方法を考えます。私たちはやりたいことを考えてから、どの芸術形式にしようかと考えることがよくあります。

詩も病院のあちこちで使っています。ある患者層には、音楽が一番効果的な場合もあります。とてもアクティブなダンスプログラムも病院で開催しています。患者にどういった動きがいいのかと看護師と直に相談して決めたりします。

次頁の画像は10代のがん患者向けの病棟のアートです。アーティストはこの病棟の若い患者と長い間対話し、彼らが何を求めているのか明らかにしました。この病棟にいる患者と似たような経験をしている若者



エレベーターロビーのアート作品



産科エリアにある抽象的な作品



地元の学校の子もたちとの活動の様子



患者にインタビューをした話を写真とともに貼り出した展示



10代のがん患者向けの病棟にあるアート



景色の良い窓(左)をあえて遮って、アートを設置(右)

集団をテーマとしたアート作品になりました。それらがこの病棟に飾られていますが、こちらは髪の毛を失ったら何ができるかと考えるコーナーです。

また病棟には窓がたくさんありますが、景色が良いこともありません。ナイチンゲールが光は大切だと言っていたのですが、時には右上の画像のようにあえて遮ることも必要です。

下の画像は病院の正面にあるレセプションの場所で、家族を失った方が過ごす部屋としてアーティストの助けを得て作られました。天然の素材が多く使われ、もう1つ重要なことに壁にカーブが付けられています。直線を脱して曲線にしていくことは、「病院らしくない病院」を作る手法の1つだと思います。

日本のアーティスト柚木先生による作品もあり、病院に寄贈いただきました。布地なので感染対策のためにガラスのカバーをつける必要がありました。



亡くなった方の家族が利用できる専用の部屋

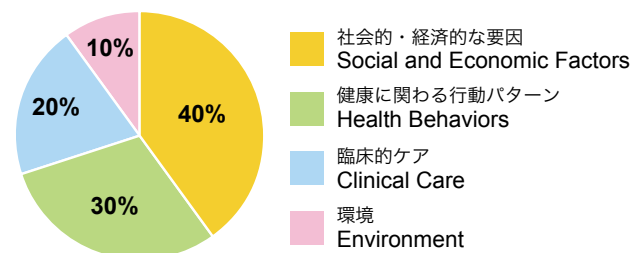
健康の要因の8割は医療制度の外に

これから病院にとどまらず、アートがいかにヘルスケアに影響するかを話したいと思います。健康に対してアートが効果的な領域はいくつもあります。例えば音楽、ドラマセラピーもあります。トリスタンはアートが医療訓練を変化・改善することができることも話していました。

おそらく現在の英国において、アートと健康のつながりの大きな部分は、コミュニティにあるのではないのでしょうか。多くの人々、アーティストが、その個人や集団の健康をさらに改善しようと、さまざまな活動をしています。私たちの健康や幸せに、あらゆるものがどう影響するかを考えることは、有意義なことです。

健康状態の10%は私たちの環境に起因し、例えばその場の空気質などで変わってきます。それから社会のおよび経済的な要素、貧困などの問題が健康状態の40%に影響します。また30%は健康に関わる人間の行動パターンに起因します。十分な運動や喫煙、飲酒といったことです。そして残る医師や看護師関係の部分は20%程度に過ぎません。つまり私たちの健康に関わる要因の80%は、医療制度の外にあるのです。

健康に影響する4つの修正可能な要因
Four Modifiable Factors Impacting Health



アドボカシーによる大きな進歩

私はロンドン・アーツ・イン・ヘルス・フォーラム (LAHF) という病院関係のNPOで働いており、アーツカウンシルから財源を得ていました。活動の柱はアドボカシー(支持や擁護の意味。特に社会的な弱者の権利を擁護するための活動や運動)でした。

鈴木先生が先ほど、日本のアートとヘルスケアの3つの展望について話されました。まずエビデンスを蓄積し、アートの効果について啓発することが1つ目。それから人材育成をし、そうした活動ができる道筋をつくるのが2つ目。また一般市民の理解を促していくことが3つ目。先ほどトリスタンから1つ目については話があったと思いますが、後ほどディスカッションで他の点も例を挙げたいと思います。

では残りの時間で、アドボカシーと一般向けの啓蒙活動についてお話しますが、その前に、この団体が毎年開催しているフェスティバルについて少し紹介させてください。この事業の活動の1つに、健康についての俳句がありました。全てTwitterでシェアされたもので、その一部が下の画像です。これらの俳句を詠んだのは医師や看護師、患者たちです。健康に関する気持ちを共有したいと作られました。

では先ほどのアドボカシーに話を戻しましょう。私たちは8年ほど前にナショナル・アライアンス・フォー・アーツ、ヘルス&ウェルビーイングという団体を立ち上げました。目的は英国内で活動しているすべての小さな団体を1つにまとめることでした。それぞれの選挙区の政治家に手紙を書くようお願いしました。そして自分たちの活動をもっと広めてほしいと。

また色々なエビデンスを一カ所に取りまとめ始めました。それから、自分たちの仕事を互いに情報共有するよう進めました。アートと健康に関わる活動は、英国中にあります。でも多くの方は隣のエリアの活動は分からないため、各団体がゼロから始めなければいけません。なので、互いに共有できるように支援しました。それから同様の連携をミュージアム向けにも作りました。そして昨年この2つの団体を1つにまとめ、カルチャー・ヘルス&ウェルビーイング・アライアンスとしました。そのようにして、政治家に働きかけるよう促し、議会内に私たちの支部もできました。おかげで正式なグループとして発足しました。

この活動はアドボカシーによってこの10年間で大きく進歩しましたが、長い間の小さな歩みを積み重ねた成果でした。英国のNHS(国民保健サービス)はできて70年になりますが、設立以来アーティストはその枠組の中でさまざまな活動をしてきました。先ほどトリスタンの話にもあったように90年代以降、病院の活動に変化が始まりました。その動きがより明らかになったのが、ここ10年のことです。

Arts and the National Health Service

- 1948 Music in Hospitals
- 1959 Paintings in Hospitals
- 1973 Manchester Hospitals Art project established
- 1991 Healing Arts at St Mary's on the isle of Wight
- 1999 Chelsea and Westminster research into arts in hospital
- 2007 Department of Health review and recommendations
- 2017 All Party Parliamentary Group report-Creative health

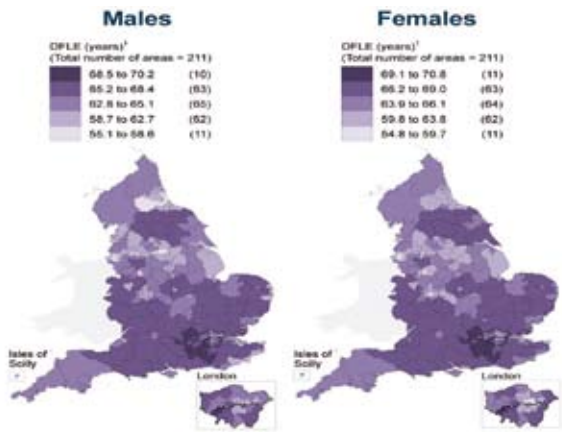
On dementia

What is this feeling?
Words elude me, tip of tongue....
Breathe, make sound and move....

By a Junior Doctor

Behind blue curtains
Treat sometimes, comfort always
Outside, bleeps go off.

London Art in Health Forumのフェスティバルで作られた健康に関する英語の俳句



男女の健康差を示すマップ。色の濃いところほど健康で長生きする地域

健康格差とアートの役割

ただ正直なところ、英国の中でもアートとヘルスケアの実践は、地域ごとにムラがあります。これはとても重要なことで、というも英国において健康上の結果に格差があるということだからです。

上の2つの図は英国の地図で、左側が男性、右側が女性です。色が濃いところほど人々が病気になることなく、長生きする地域です。また色が薄いところは、若くに病気を発症する人が多い地域です。この差は極めて大きいです。一番色が薄いところでは病気にかかるのは55歳頃からです、濃い地域は70歳頃に病気になります。例えばロンドンでもある地域では70歳まで健康な人々がいる一方、道を一本隔てるとその15年も早く病気になってしまう地域があります。

先ほど健康に影響する要因の8割は医療制度、NHSの管理外にあるとお話しました。なので健康であるにはどうしたらいいか、またそこでのクリエイティビティの役割についても、新たな議論を始める必要があります。

左下の画像は政治家たちが出した報告書です。私が冒頭で紹介したアーティストの作品がこの中に載っています。「アートのおかげで見えやすい」とあります。そして願わくば、アートの役割、健康や幸せのためにクリエイティビティが果たす役割があると、人々が感じるような主張が深まればと思います。

2年前、私は2つの仕事を辞めて、直接患者のためになる新しい仕事として、Nesta（科学技術芸術基金）の職員となりました。国レベルの慈善団体です。社会を変え、人々の生活を向上させる新しいアイデアを創出する支援をしています。私の仕事はソーシャルヘルスの分野です。そして新しいアイデアを試行的に行っています。人が互いに自分の話をするのは大昔から続くものでありますが、これは、健康は全て薬や病院に委ねられるという考え方に対し、より新しいアイデアではないでしょうか。

英国、つまりUKはイングランドだけでなく、ウェールズ、スコットランド、そして北アイルランドからなります。そしてNestaはUKの各地域で仕事異なります。例えばウェールズではアーツカウンシル・オブ・ウェールズと共同しています。その仕事はアートと健康のさまざまな実践をどう構築するかを探るものです。

Arts in Health は小規模な世界的現象

また世界各地の実践からも私は学ぼうとしています。スカンジナビアでは素晴らしい取り組みがされていますので、興味を持たれたら、ぜひフィンランドで何が起きているか調べてみてください。特に興味深いのは、伝統的なアートに焦点を当てた取り組みです。

Finland have enacted a policy around arts and health that has 3 elements:

フィンランドのアートと健康に関するポリシーの3要素

- Health and wellbeing can be promoted by means of culture. ヘルスケアの健康は文化によって促進できます。
- Art and culture can enhance inclusion at individual, community and societal levels. アートと文化は、個人、コミュニティ、社会レベルでのインクルージョンを強化できます。
- Everyone should have the right to participate in, and enjoy, the cultural life of the community. 誰もがコミュニティの文化的生活に参加し、楽しむ権利を持つべきです。



(上) アーティストグループのアートを使ったキャンペーン
(右) 生きがい ikigai についての概念図



それからアートやデザインは、医療サービスのうまく機能しない部分の代わりにはなりません。ただアートやデザインは、医療サービスに人間性を再注入することができると思います。

マイク・ホワイトが英国で行った調査があります。彼はアートとヘルスに関する本を書きました。彼は「Arts in Health は小規模な世界的現象だ」と書いています。まさにその通りだと思います。

アートを通して小規模ながら健康を改善しようとするすばらしい事例を、この数日、ここ日本でもいくつか見てきました。

というわけで英国のほか世界中で動きがみられる分野であります。ただアートは何か特別なのかを、覚えておかなければいけません。まずアートは挑戦であり、システムを動かします。それもまた重要なことです。

上はアーティストのグループが進めているキャンペーンです。これまで精神衛生の組織での経験を持つ人もメンバーにいます。そしてアートを使って、そのしくみに対する怒りを発信しています。彼らは変化を起こそうとしているわけです。英国では、小銭をチャリティに寄付する伝統があり、募金箱があちこちに

ります。そこにはチャリティの名前が貼られています。左下の画像には「普通の人を支援して」と書いてあります。精神衛生の活動家が作った作品で、普通なんて無いのだという考えを発するのためのキャンペーンです。

次に、父が病気で冒頭に話した病院に入院した時のことを話しましょう。私が子どものころ怖い思いをしてから30年後のことでした。見た目は明るくなりましたが、あいかわらずデカくて恐ろしい建物で、逃げられないような雰囲気でした。しかし中に入るとたくさんのお絵がありとても嬉しかったです。おかげで私は楽になりました。私の子どもはかつての私と同じくらいの年齢でしたが、私の時よりも確実に楽な気持ちで祖父のお見舞いに行けたはずです。

「生きがい」について話をし、講演を締めましょう。日本の言葉ですからやや気が引けます。的外れなことを言ってもお許しください。私はこの「生きがい」という概念を学んだとき、とても興奮しました。なぜかと言うと、アートと健康がそろった時にこそ、人生に「生きがい」がもたらされると思ったからです。

最後に短い動画をご覧ください。病院で撮られたダンスプログラムの様子です。ありがとうございます。



精神衛生の活動家による「普通なんてない」という考えを発するのためのキャンペーン



ダンスプログラムの一環で制作された musical residency の短編映像「In My Pyjamas」のひとつコマ

質疑応答・ディスカッション

2019年10月14日(月・祝)に東京国立近代美術館で開催された国際シンポジウムで、ホーキンス氏とヘブロン氏の講演後、来場者の皆様からの質問票の内容を取り上げながら、質疑応答・ディスカッションをしました。(本文中にある発言者の敬称は省略)

登壇者：トリストラン・ホーキンス、ダミアン・ヘブロン

パネリスト：加藤 敬 (東京国立近代美術館 館長)、鈴木 賢一 (名古屋市立大学大学院芸術工学研究科 教授)

コーディネーター：阿部 順子 (椋山女学園大学生生活科学部生活環境デザイン学科 准教授)

右から、
ダミアン・ヘブロン氏
トリストラン・ホーキンス氏
鈴木賢一氏、加藤 敬氏
阿部順子氏



阿部 本日はご来場ありがとうございます。私はもともと建築の歴史が専門ですが、8年前に重症の先天性心疾患のある子どもを授かり、患児の母親としての視点でこの研究に携わっております。

今日、会場には医療関係者、研究者、建築関係者、学生さん、それからアートに関心のある方、いろいろな立場の方がおられます。質問票もたくさんありがとうございます。その中から特に多かった質問を取り上げたいと思いますが、その前に、加藤館長からお二人の講演を聞いたご感想を伺いたしたいと思います。

加藤 私は今この美術館の館長をしていますが、3年ほど前から2019年の3月まで、名古屋市立大学で教授をしていました。その前は文化庁にいて、芸術系大学の教育研究機能を使って、芸術が社会にどういった価値、効果があるのかを具体化できるような取り組みをしておると、当時仕事をしていました。そうしたつながりがあり今日ここにいます。

美術館の場合、来館者がアート作品を鑑賞するのが一般的な形ですが、おそらくアートの持つ力は、美術館以外の場でも、社会の様々な問題に対して何かしらの効果や意義、価値があるのではないのでしょうか。そうした問題意識が、文化庁にいた時から、今この館長の立場としてもあります。今日英国の先進的な事例をお聞きし、考える機会をいただき非常に嬉しく思っております。

阿部 ありがとうございます。さて、質問の中で一番多かったものは何だと思えますか。きっと皆様はやる気に溢れているのだと思いますが、費用に関するものでした。プロジェクト実現のためのお金をどのように得ているのか、そして政府からの財政的援助はあるのか。その2つについてお尋ねします。

ホーキンス まず私の仕事に関しては、政府からの資金はいっさいありません。その理由としては、現在から近い将来の英国の経済状況として、政府からお金が出ることは考えられないからです。私が勤めているのはNPO、チャリティ団体です。そこで個人から寄付を受けたり、様々な省庁の助成金に応募したりして資金を得ており、NHS(国民保険サービス)から直接お金はいただいています。私の経験からすると、本当によいプロジェクトであれば、そして頑固に依頼し続ければ、結果が得られると思えます。それから連携を組むという方法もあります。私たちは多くのボランティアと仕事をしていますし、協力関係の文化団体もあります。そうすることであまりお金がかかりませんし、時には無料でできることもあります。

ヘブロン 数点、私からお話しします。私がケンブリッジ大学病院で始めたプロジェクトは、1つの助成金を受けて始まりました。そしてプリントのコレクションを買い、そのうち半分を売り資金としました。なので

起業家精神を発揮する機会があります。それから2つの企画展スペースを運営し、そこで展示した作品が売れると手数料をいただきました。トリストランも言っていたように、助成金だけでなく作品の販売など、資金を得るためにできる方法はいくつもあります。

また保険関連の資金が一部入ることもあります。そうした資金は新しいアイデアを試すためのもので、先ほど映像でお見せしたダンスのプロジェクトは、ダンスをすることで患者の転倒を防げるかを試すものでした。また最近では社会的処方(Social prescribing)という考え方にも保健の資金が使われています。これは地域で活動している医者が医薬品を処方する以外の形で患者を支援する機会を生み出すシステムです。例えば、孤独を感じていたり気分が落ち込んでいたりする患者がいるかもしれません。そうした患者に対し抗うつ剤を処方するのではなく、新しい活動を試すような機会を提供しています。具体的には詩の講座やガーデニングのクラブに参加するような活動などです。

阿部 彼らの出身はアーティストですが、今の職業はアートマネージャーとかアートディレクターという肩書きが付きます。今、皆様驚かれたと思うのですが、彼らは資金のコーディネートについても非常に詳しい。一方で日本にそうしたお金の面も含めてアートをマネジメントする仕事の人はいるのでしょうか。鈴木先生、日本の現状を教えてください。

鈴木 アートマネージャーという職能が、日本に、特にヘルスケア分野にあるかどうか。私の知る限りではあまり事例を聞いたことがありません。でもそうした能力を持った人たちはたくさんいるような気がしていて、だからこそ、こうした職能で仕事のできる方が出てくるよう人材を育てたいというのが私の気持ちです。僕は建築計画を専門にしている教員として、例えば小児医療でのアートの話は、建物の新築や建替えに合わせた環境を整えるためのアートが多いので、今のところ私が携わっているプロジェクトのお金は工事費から捻出されています。ところが工事が終わってしまうとやりっ放しで、以降そのままとなってしまいます。この環境整備がもう少し持続的にできること、何よりも音楽だとか演劇だとかものとして残らない活動が大事だと思っていますが、残念ながらそのためのお金の出所は何もないと思います。病院でさえも、壁に絵を描くので必要な費用を捻出してほしいと言っても、予算に組まれていないので出ないのです。時にはわずかなお金なのですが捻出できないので断念しますということもありました。

阿部 ありがとうございます。トリストランもダミアンも、昨日名古屋の近くにある、あいち小児保健医療総合センターという大変すぐれた子ども病院などを見学されたのですが、それについてお二人の印象を聞かせてください。このようにすごく財源がない、アー



「アートの持つ力は、社会の様々な問題に対して何かしらの効果や意義、価値があるのではないのでしょうか」

加藤 敬 東京国立近代美術館 館長、元文化庁芸術文化課長



「ヘルスケア分野のアートマネージャーの能力を持った人はたくさんいる気がしていて、そうした職能で活躍できる人材を育てたい」

鈴木 賢一 名古屋市立大学大学院芸術工学研究科 教授

トマネージャーもいない中で、日本ではやっているわけですが、日本の施設を見てどう思われたか教えてください。

ホーキンス 建築物として設計が素晴らしいと感銘を受けました。病院と外とのつながりがきちんと作られていること、また病院からの景観も素晴らしいものでした。日本全体に対する私の印象ですが、非常にチームの皆様にもエネルギーや熱意がありました。そしてここにいる皆様にもそう感じますので、ここ数年で大きなことが成し遂げられると確信しています。昨日もさまざまな活動が病院で行われており、私の病院ととても似ていました。音楽家の演奏や、子どもたちが工作をするワークショップもありました。病院の外、地域コミュニティにまで手を広げ、地域の方に病院のことを理解してもらうことで、ゆくゆくは金銭的な貢献やボランティアにつながる可能性があり、とても豊かな分野であると思います。

ヘブロン まず私は病院が非常によく維持管理されていることに心を打たれました。訪ねた先の方々、ご自身の仕事に大きな誇りを持っていました。自分たちの病院なのだという意識をはっきりと感じました。これは無形のものですが、素晴らしい資産であると思います。全ての職員が病院の環境を一生懸命に手入れしていました。それによって大きな成果につながり、さらに環境に改善をもたらすのではないのでしょうか。特に台風が前日来て、いつも以上のストレスにさらされていた中で、あれほど整った環境を守り通しているのは素晴らしいことだと思いました。

阿部 たくさん褒めの言葉をありがとうございます。一方で今日の質問カードを見ると、やってみたいアイデアをお持ちの方がたくさんいるように感じまし

た。でも周りの人や病院長をどう説得したらいいのか、始めの第一歩はどう踏んだらいいのかが分からない。そうしたヘルスケアアートをやりたいという志を持っている人に向けて、メッセージをいただけますか。

ホーキンス 私たち英国もかつては同じ状況にありましたが、現在でも色々な差はあり国内にムラがありますが、自分の状況に賢くアプローチする必要があるのではないのでしょうか。例えばどんな言葉を使うか。私の肩書は2つあり、アートディレクターのほか患者環境責任者という役割も負っています。状況によってアートの話をするときもあれば、患者体験や病院環境の改善について話をするときもあります。うまく進めるためにはさまざまな方法があり、どの人に話をすべきか、誰が権限を持っているのか、どのような人が関心を持っているのかを考える必要があります。

さらに英国では、効果測定、エビデンスを出すことが大切になってきます。例えば、複雑な病院の中でアートの力を借りて道案内をすることで、迷って予約時間に遅れる人が減ったと示すことができれば、効果を実証することになり、組織の人に理解してもらえるのではないのでしょうか。アートと療養環境の影響については、世界中に膨大な調査結果があり、それらを活用しない手はないと思います。それから患者さんの声もまた大切です。例えば患者さんにアンケートをしたり、同じような要望を20人ぐらい集めたりして、権限のある人に提示し、試行的にやらせてもらいその結果を測ることもできます。プロジェクトを始めるのにそうしたシンプルですぐできる方法もあります。

ヘブロン 私からは3点お話しします。1つ目に関連して、まず昨日訪ねた病院について、言い忘れたことを追加でお話しします。日本のヘルスケア施設でとてもよいと思ったのは、自然素材がよく使われていること

英国の二人の日本での視察風景。
下はあいち小児保健医療総合センター。
中2枚は名古屋市立大学病院。
右は東海市の生協高齢者施設のんびり村。



です。木材の使い方も素晴らしいです。それが話したかったことにつながるのですが、アプローチをする際、自然のようにあること、有機的に、反発を買わないように進めていく必要があると思います。

また1つの方法にこだわりすぎないことも大切です。一人目にダメだと言われても、その議論を違う切り取り方をすれば、別の人は受け入れてくれるかもしれません。病院であるダンスのプログラムを始めるのに5年ほどかかりました。というのもずっとダメと言われ続けたからです。院内で患者の転倒を防ぐことを仕事としている人に話をし、ようやく道が開けました。彼女自身ダンスが大好きだということも分かりました。それで何か光が見え、一緒に転倒を防止するという取り組みが始まりました。ですので、同じ目的の人を見つけることが大事だと思います。

もう一例として、私の病院では大規模なプログラムを実施しており、患者さんがパジャマを脱いで洋服に着替え、ベッドから出てもらうことを目的としています。そうすることで患者さんは、より早く退院の準備ができます。ですので成し遂げるためには、革新的な、様々な方法を見つけることが大事です。

阿部 一歩を踏み出すには、仲間作りや粘り強さ、柔軟性、したたかさ、賢さ、それから最終的にはコミュニケーション技術が必要だと思います。今のダンスプログラムは実施まで5年間、その間何百人もの人と話していると思います。皆様が心の中で温めているアイデアをぜひ粘り強く育てていただければと思います。では次にヘルスケアアートは、医療スタッフにはどのような利益があるか教えていただけますか。

ホーキンス スタッフは一日のほとんどを病院で過ごし、英国では基本的に1日12時間で組まれます。ですのでスタッフの環境は、患者さんと同じように重要です。なので、アートを選ぶときはスタッフにも関わってもらいます。なぜなら嫌な作品を彼らの働く空間に選ばないからです。相談は患者さんと同じくらいスタッフと行うことも大事です。

ヘブロン 環境ももちろんですが、アートを使うことでスタッフは患者さんと新しい会話ができます。病院ではよく、スタッフは患者さんに何々しなさいと言いがちです。コミュニケーションが一方方向になっている



「効果測定、エビデンスを出すことが大切です。例えばアートを使って道案内をし、遅れる人が減れば、効果の実証になります」

トリストラン・ホーキンス CW+ アートディレクター・療養環境ディレクター



「病院のコミュニケーションは、医療者から患者への一方方向になりがちですが、アートは対話の方法を提供できるのです」

ダミアン・ヘブロン ネスタ財団 健康研究所 プログラムマネージャー

わけです。そこでアートは対話をつくる方法を提供できるのです。例えば壁にかかっているアートについて話をしたり、何かに一緒に参加をしたり、その人のことを知る新しい方法となります。そして医者や看護師が患者さんをより知ることで、より良い状況を生み出すことができると思います。我々はこれをサービス改善と呼んでいます。アーティストは自身の活動をこのような言葉で説明することはないかもしれません。ですので臨床医にその価値が理解できるように、アートを提示してください。

阿部 では最後に、お一人ずつ短いメッセージを頂きたいと思います。では、加藤館長お願いいたします。

加藤 今日ご参加の皆様は色々なご職業、お立場があるかと思いますが、それぞれの場でアートを社会にどう活用するかということ日々考えていただければと思います。よろしくお願いたします。

鈴木 今日新たに気が付くことがありました。1つは、デジタルアートやITによるエビデンスの取り方とか、テクノロジーによってアートやエビデンスのありようが変わるのではないかという予感を非常に強く持ったこと。もう1つは、ソーシャルアートという考え方がヘブロンさんから示され、例の図の真ん中に「生きがい」という言葉がありました。アートと医療に「生きがい」という3つ目の言葉があるのだと強く思いました。最後の1点は、私は英国の取り組みが私たちより2周も3周も先行していると思っていましたが、実は案外そうではないかもしれないと気が付きました。大変悩んで、いろいろなことにチャレンジされていて、私たちもチャレンジするという点は全く一緒であって、悩みを共有しながらこれから一緒にヘルスケアアートの世界を広げていけると、感じました。



ホーキンス それはとてもいい指摘です。今回日本に来て、自分の仕事を紹介しましたが、同時に私は皆様からたくさんものを教えていただきました。私たちが互いに知見を共有し、そして資源を共有していくことはとても大切だと思います。

ヘブロン では1つお話しします。マンチェスターのミュージアムに来た新しいディレクターは「役に立つミュージアム」を掲げています。コミュニティの真ん中にあり、皆のためになる場所でありたいという願いがこめられています。先ほど加藤館長がおっしゃっていた話と非常に近いものを感じました。ここ数日、日本でたくさんの方とアーティストとの共同を知りすばらしいと思いましたし、また今日こうした場で開催いただいたことも感謝しています。皆様は関心も高く資源も豊富だと思います。ですので、とても将来性が高いと感じています。

阿部 最後に一言だけ。さっきヘブロンさんがネットワーク、ナショナルアライアンスを作ったばかりだと説明がありました。日本にはアライアンスはないですけど、国際的なネットワーク、プラットフォームのきっかけが今回できたのではないかと思います。遠くから来ていただき、皆様も参加くださったおかげで、小さな最初の輪ができたのではないのでしょうか。本当にありがとうございました。



「国際的なヘルスケアアートのネットワークのきっかけが、今回できたのではないですか」

阿部 順子 梶山女学園大学生生活科学部生活環境デザイン学科 准教授

動画配信のご案内

この2019年に開催された国際シンポジウム<東京会場>の内容は動画でも視聴できます。動画のURLなど詳しくは本事業のHPをご参照ください。



2019 国際シンポジウム概要

「英国の先進事例に学ぶ ヘルスケアアートとそのマネジメント」

<名古屋会場> 2019年10月12日(土) 名古屋市立大学病院 中央診療棟 3階大ホール
 主催：なごやヘルスケア・アートマネジメント推進プロジェクト(名古屋市立大学内)
 <東京会場> 2019年10月14日(日・祝) 東京国立近代美術館 地下1階講堂
 主催：なごやヘルスケア・アートマネジメント推進プロジェクト(名古屋市立大学内)、東京国立近代美術館
 プログラム ・開会のご挨拶

(名古屋会場) 名古屋市立大学 理事長・学長 郡 健二郎

(東京会場) 東京国立近代美術館 館長 加藤 敬

・事業の趣旨・講師・講義について

名古屋市立大学大学院芸術工学研究科教授 鈴木 賢一

・講演1 「英国の医療アートディレクターの役割」 TrystanHawkins

・講演2 「英国における医療とアート」 Damian Hebron

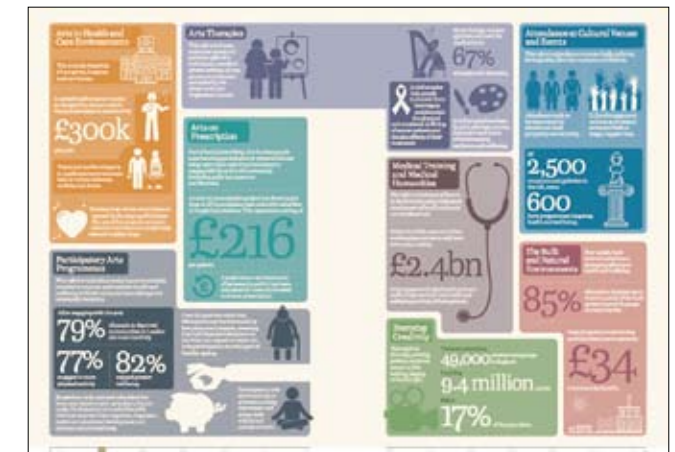
・質疑応答・ディスカッション TrystanHawkins、Damian Hebron

パネリスト 加藤 敬(東京会場のみ)・鈴木 賢一、コーディネーター 阿部 順子

参考資料『Creative-Health : the-Arts-for-Health-and-Wellbeing』

ダミアン・ヘブロン氏の講演で紹介のあった、英国の芸術と健康・福祉を考える超党派の議員グループ (APPGAHW) が2017年に出したレポートは、Webサイトで閲覧が可能です。内容は、2015-2017年の2年間に実施した医療・社会福祉分野における芸術の実践と研究に関する調査から、政策・実践の改善に向けた提言を行ったものになります。次のURLから見られます(英文)。

<https://www.culturehealthandwellbeing.org.uk/appg-inquiry/>



英国の Arts in Health とその組織

高野 真悟 TAKANO Shingo

彫刻家、名古屋市立大学大学院 芸術工学研究科 博士後期課程

名古屋市立大学の学生有志からなるホスピタルアート集団「はみんぐ」を率い、様々なヘルスケアアートを手がける。彫刻家としてアートが役に立つヘルスケアの分野を研究中。2016年ロンドンの病院を視察し、イギリスにおけるアートインヘルスを調査した。



私は彫刻家で日展という公募団体などで活動しています。自己表現としてやってきたアートが人の役に立てる分野があると知り、このヘルスケアアートを研究したいと、現在、名古屋市立大学博士課程に在籍しています。2016年に英国の病院を訪問する機会をいただきました。本日は、その時の見学や関係者へのヒアリング結果などを報告いたします。

ロンドンにあるヘルスケアアートを積極的に取り入れている3つの病院を視察しました。

Chelsea and Westminster Hospital (CWH)

CWHはロックスターや有名人が多く住む地区に1993年に建てられました。地域の富裕層からの寄付も多く、院内には個人の莫大な寄付でつくられた映画館があり、入院患者は車椅子やベッドでも映画を楽しむことができます。アトリウムにある巨大な

モビールは20-30年前の作品ですが全然古さを感じさせません。エントランスには変わった彫刻があり寄付を集めていました。どこからお金を入れるのか…とよく見てみると、脇に穴が空いていて、僕もつい寄付をしてしまいました。

Great Ormond Street Hospital For Children (GOSH)

GOSHは、大英博物館を始め多くの博物館や大学がある閑静で文化的な地区に立地しています。英国有数の子ども病院で寄付金も豊富に集まるそうです。手術前控室の廊下の壁にはLEDライトが仕込んであり、人が通ると、動物が横切るようなシルエットが出てくる仕掛けがありました。手術を待つ患者さんの気晴らしになるのでしょうか。エントランスの40mもの壁画は100人以上の子どもの患者たちの魚の絵をコラージュしたもので、曲線を描く壁面や船の形をした受付とともに、やわらかい雰囲気をつくっていました。



上2枚はCWHのアトリウムに設置されたモビールと、エントランスの募金を集める彫刻作品。右2枚はGOSHのインタラクティブなデジタルな壁と、子どもの絵をコラージュした壁画。

RLHにある子どものためのアクティビティルームと、カラフルな小児科の壁



Royal London Hospital (RLH)

RLHはバングラデシュからの移民が多く住む庶民的な地区にあります。1階廊下に絵が飾られていましたが、全部売り物です。絵の販売収益は患者のプログラムに還元されるシステムがあります。上の画像のようなカラフルな小児科の壁や、さながらアミューズメントパークのようなアクティビティルームもありました。

こうした素晴らしい病院を見て、単純な疑問が湧いてきました。どのようにしてアートを設置したのだろう。システムや管理のほか、どういった組織や役割の人がいるのだろうと。

その英国の状況を見る前に、日本の状況を整理したいと思います。

大学の取り組みとして、私の所属する鈴木研究室でも病院の壁に絵を描くなどして療養環境を改善する活動をしています。2015年には富山県リハビリテーション病院・子ども支援センターでエントランスのモビー

ルから壁面アート、壁紙、床、天井まで、絵本も含めて、広く取り組ませていただきました。設置はかなり大変でしたが、とても勉強になりました。

研究室の活動は2000年から始まり約40箇所に及び、なかなか長い活動だと思います。ただ完成後はあまり関わりがないことが多く、少し残念な部分です。こういった大学による活動は国内に複数ありますが、単発的な活動になってしまう傾向があるように思います。

NPO法人としてヘルスケアアートに取り組む団体も各地にあります。

- ・アーツプロジェクト
- ・子ども健康フォーラム
- ・チア!アート
- ・ワンダーアートプロダクション
- ・スマイリングホスピタルジャパン (SHJ)
- ・キッズアートプロジェクト
- ・日本ホスピタル・クラウン協会
- ・Arts Alive



名古屋市立大学鈴木研究室で取り組んだ富山県リハビリテーション病院・子ども支援センターでの絵本制作、地元の学生とのペイント、交流ロビーの空間装飾

英国全土にアートを提供する団体や個人は 960 以上もあることが分かっています。その中で各地方を取りまとめる組織が 9 つあって、それが地域代表となっています。ロンドンでは、London Art in Health Forum (LAHF) がとりまとめている、イベントの開催や、定期的なニュースレター、各団体にアドバイスやサポート、情報の集約、組織同士の交流、医療スタッフへの教育やウェブサイトの運営を主な業務として、Arts in Health 全体の底上げをしています。



CWH の Arts in Health 組織である cw+ の寄付案内のページ

Arts in Health 組織の資金調達

運営上の最大の課題は資金調達で、Arts in Health 組織がそれぞれ努力をしています。多くは慈善事業金 (Charity money) で運営されていますが、文献とヒアリング調査によると資金調達の方法は次の 13 通りあり、状況に応じて組み合わせています。

- 1) 自己資金：医療機関や付属のチャリティ団体からの資金。
- 2) 物販：展示しているアート作品の売却益やグッズ販売などの収益。
- 3) イベント参加料：パーティやイベントなど参加者、アートプログラムに参加する患者からの参加料。
- 4) 募金：チャリティイベントやホームページからの寄付金、募金箱による募金など。
- 5) クラウドファンディング：資金調達の目標とスケジュールを設定し、広く協力を求めるインターネットを通じた資金調達。
- 6) ボランティアプログラム：アーティストが行う、無

料のアートプログラム。

- 7) 現物サポート：人的サポートも含む、機材など現物の提供。
- 8) 助成金：政府、アーツカウンシル、地方自治体、チャリティ団体などからの助成金。
- 9) スポンサーシップ：個人や企業のスポンサーによる資金調達。
- 10) 研究費：大学などの研究機関からの研究費の活用。
- 11) 社会的投資：ソーシャル・インベストメントと呼ばれる、社会的リターンを重視する投資。
- 12) コミッショニング：医療機関からの契約の、企業、チャリティ団体、その他の法人への委託。
- 13) パーセントプログラム (Per Cent for Art Scheme)：公共の建物 (病院を含む) の新築費の一部をアートの委託に割り当てるという方針を利用した資金調達。

Arts in Health 8 つの分類

視察と文献から Arts in Health を 8 つの領域に分類してみました。



RLH の廊下で展示販売されているアート作品、GOSH のチャリティ組織への寄付を募るブース、GOSH への寄付を募るチャリティの自転車レース ※自転車レースの画像は <https://skylineevents.co.uk/events/london-to-brighton-cycle-ride-for-gosh/> より引用



Arts in Health の領域と対象者

Regions of Arts in health (領域)	Means method (方法)	Benefit (効果)	Objects (対象者)
① Arts in psychotherapy (心理療法におけるアート)	Drama therapy (ドラマ療法)	Reduce antisocial behaviour (反社会行為を減らす)	Teenagers (ティーンネイジャー)
	Art therapy (アートセラピー)	Express difficult feelings (難しい感情を表現)	People who have been bereaved (遺族)
	Music therapy (音楽療法)	Communicate without words (無言の交流)	Children with autistic spectrum disorders (自閉症の子供)
	Dance therapy (ダンスセラピー)	Reconnect with the body (身体の再接続)	People coping with chronic illnesses (慢性疾患患者)
	Poetry therapy (文学療法)	Reduce symptoms of post-traumatic stress (心的外傷を減らす)	Military veterans (退役軍人)
	Play therapy (遊戯療法)	Distract (気晴らし)	Children having painful procedures (痛みを抱える子供)
② Arts on Prescription (指導するアート)	website (ウェブサイト)	raised self-esteem (自尊心向上)	mental health problems and social isolation (精神疾患患者と社会的孤立者)
	GP's referral (一般開業医の紹介)	provided a sense of purpose (目的意識の付与)	mental health problems and social isolation (精神疾患患者と社会的孤立者)
	Leaflets and posters (リーフレットとポスター)	enhanced social skills and community integration (社会スキルとコミュニティの強化)	mental health problems and social isolation (精神疾患患者と社会的孤立者)
③ Participatory arts programmes for specific patient groups (特定の患者のための参加型アートプログラム)	Dance-physio classes (ダンス理学療法のクラス)	Physical function recovery (身体機能の回復)	Amputees (肢体切断患者)
	Dementia reminiscence sessions (認知症再訪セッション)	Reminiscence (記憶の再起)	Dementia (認知症患者)
	Singing workshops (歌のワークショップ)	Physical function recovery (身体機能の回復)	Chronic lung disease (慢性肺疾患の患者)
	Drumming workshops (ドラムワークショップ)	Mental function recovery (精神機能の回復)	Depression (うつ病患者)
	Museum object handling (手で触れる博物館)	Increases in wellbeing (幸福度の向上)	Alzheimer's disease (アルツハイマー患者)
	Magic tricks (手品)	Improve motor skills (動きの改善)	Movement impairments (運動機能障害者)
④ Arts in healthcare technology (医療技術における芸術)	Hip-hop groups (ヒップホップグループ)	Support networks and reduce isolation (ネットワーク構築の補助、孤立の減少)	Teenagers (ティーンネイジャー)
	Guided music and imagery for chronic pain (ガイド付き音楽と画像)	Reduce pain (痛みの軽減)	Chronic pain (慢性疼痛患者)
	Live streaming of nature (自然のストリーミング映像)	De-stress (ストレス軽減)	Patients in isolation (隔離された患者)
	Relaxation films (リラクセス映像)	Reduce anxiety (不安軽減)	Waiting areas (待合室)
	Games apps (ゲームアプリ)	Distracting (気晴らし)	Children having anaesthetics (こども麻酔患者)
	Recorded lullabies (録音された子守唄)	Calm (落ち着き)	Premature babies (未熟児)
⑤ Arts-based training for staff (アートに基づいた医療スタッフの研修)	Reduce burnout (燃え尽き症候群の減少)	Staff (スタッフ)	
	Photography (写真)	Improve diagnostic skills (診断技術を改善)	Staff (スタッフ)
	Music in theatre (手術室での音楽)	Help surgeons concentrate (集中力の助け)	Staff (スタッフ)
	Role play sessions (ロールプレイングセッション)	Improve patient communication (患者とのコミュニケーションの改善)	Staff (スタッフ)
	Expressive poetry (詩の表現)	Improve job satisfaction (仕事満足度の改善)	Staff (スタッフ)
	Staff choirs (スタッフ合唱団)	Enhance teamwork (チームワークの強化)	Staff (スタッフ)
⑥ General arts activities in everyday life (一般的な芸術活動)	Learning an instrument (楽器の習得)	Support cognition (認識をサポート)	Patients (患者)
	Attending a concert (コンサートの鑑賞)	De-stress (ストレス軽減)	Patients (患者)
	Visiting a gallery (ギャラリーの訪問)	Feel inspired (インスピレーションの喚起)	Patients (患者)
	Leading a book club (読書クラブで本を読む)	Develop social support networks (社会支援のネットワークを構築)	Patients (患者)
	Ballet (バレエ教室)	Bone strength (骨の強化)	Patients (患者)
	Pottery class (陶器の教室)	Improve self-esteem (自尊心を高める)	Patients (患者)
⑦ Arts in the health care environment (医療環境におけるアート)	Radio (ラジオ)	Improve mood (気分を改善)	Patients (患者)
	Colour schemes and design (配色とデザイン)	Relaxing environments (リラックスした環境)	In-patients (入院患者)
	Architectural design (建築設計)	Re-humanize (人間性を取り戻す)	Personalized bed areas (個室患者)
	Ambient sounds or background music (サウンドデザイン)	Calmness (穏やかな気持ち)	Critical care spaces (救急センター)
	Artistic wayfinding (芸術的なウェイファインディング)	Reduce disorientation (方向転換を減らす)	Patients (患者)
	Artwork and films (アート作品と映画)	Distraction (紛らわし)	Waiting areas (待合)
⑧ Arts in health promotion (健康増進のためのアート)	Gardens (庭園)	Enhance wellbeing (ウェルビーイングを強化)	Patients (患者)
	Exhibitions and public concerts (展示会や公共コンサート)	Distraction (紛らわし)	Patients, staff, and visitors (患者、スタッフ、訪問者)
	Lighting design (照明デザイン)	Relaxing environments (リラックスした環境)	Patients, staff, and visitors (患者、スタッフ、訪問者)
	Wall paint (ウォールペイント)	Relaxing environments (リラックスした環境)	Patients, staff, and visitors (患者、スタッフ、訪問者)
	Visual arts publicity campaigns (視覚芸術の広報キャンペーン)	Raise understanding about oral health (口腔の健康に関する理解を深める)	Citizen (市民)
	Concerts (コンサート)	Raise awareness and money to combat poverty (貧困と戦うための意識の強化と集金)	Citizen (市民)
⑧ Arts in health promotion (健康増進のためのアート)	Songs (歌)	Teaching about sexual health and HIV (性教育と HIV の教育)	Citizen (市民)
	Touring theatre performances that dramatize issues around mental health (精神衛生に関する演劇公演のツアー)	Health promotion (健康増進)	Citizen (市民)
	Pop-up dance performances in public spaces (ポップアップダンス公演)	Highlight new exercise guidelines (新しい運動の強調)	Citizen (市民)
	Festival (祭り)	Raise understanding Arts in Health (アートインヘルスの理解を深める)	Citizen (市民)

高野・阿部・鈴木 (2019) 「英国の病院の Arts in Health の概念と活動組織に関する研究 ロンドンの先進的な 3 病院の事例から」より (本誌用に一部修正)

1) Arts in psychotherapy: 病院での活動で、治療を目的とする。対象範囲は特定の個人患者を基本としている。音楽療法、ドラマ療法、アートセラピーなどのアートによる心理療法。

2) Arts on Prescription: ウェブサイト上の活動、もしくは専門病院に至る前段階の地域医療における活動。社会的孤立を感じている人やメンタルヘルスに問題がある人に社会復帰やコミュニケーション能力の向上のための参加型アートプログラムを紹介するシステム、ウェブサイト、リーフレット及びポスターの制作。

3) Participatory arts programmes for specific patient groups: 院内の活動で、治療を目的としている。肢体を切断した患者への歌のワークショップ、うつ病患者のドラマセッション、運動機能障害の患者のための手品教室などの特定の患者グループのための参加型アートプログラム。

4) Arts in healthcare technology: 病院での活動で、直接的な治療を目的としないデジタルテクノロジーを利用した活動。デジタル機器を利用したプレパレーション、アプリの開発、リラックスするための映像等。

5) General arts activities in everyday life: 病院での活動で、直接的な治療を目的としない活動。楽器の学習、コンサートの鑑賞、ラジオや映画の視聴などの日常的なアート活動。

6) Arts-based training for staff: スタッフのための活動全般を指す。ワークショップ、手術室での音楽、コミュニケーション能力向上のための研修、スタッフ合唱団などのスタッフへのアートプログラム。

7) Arts in the health care environment: 病院での活動で、療養環境に影響する活動全般。絵画の展示、

サイン計画やインテリアの配色、サウンド計画、庭園などの医療環境改善のためのアートの利用。

8) Arts in health promotion: 病院を含んだ市民生活の中での活動。市民を対象に健康理解のための広告、貧困のためのチャリティーイベント、HIV 教育のための歌などのプロモーションのためのアート活動。

これらの境界は明確でなく、複合的になされる場合もあります。対象者も患者だけでなく医療者や一般市民を対象にしたものまで幅広く、医療行為から市民活動に至るまで広範囲に Arts in Health が英国では実践されています。

チャレンジする姿勢

最後にチャレンジというキーワードでお話します。日本の病院では空間にマッチした作品を設置する傾向があるように思いますが、英国では全体の統一感はありません。割と挑戦的な作品も多く感じました。それぞれが混在しているのですが、そこにアーティストに対する敬意を感じました。アーティストのチャレンジ精神、表現を大事にしていると。

例えば左下の彫刻は目がなくて怖いという感想もあると聞きました。他にも骸骨をモチーフにしたものや、ビルの合間の景色を利用したアートなどもありました。色彩も割とビビッドな配色が多く、日本ではあまり使われない濃い紫色なども多く使われていました。

それぞれのアーティストが考える表現の多様性が人々を惹きつけ、気を紛らわせ、治療に前向きな意識を作り出しているのではないのでしょうか。アーティストは新しい感覚で療養空間というものにチャレンジして



National Alliance for Arts, Health and Wellbeing の HP と、The All-Party Parliamentary Group on Arts, Health and Wellbeing の HP

いると感じました。

作品だけではなく、政治的にも挑戦しています。先ほど話した 9 つの地域代表組織が 2012 年 National Alliance for Arts, Health and Wellbeing を結成して、情報と研究の拠点としてイギリス全土で底上げを目指す組織ができました。さらに 2014 年には The All-Party Parliamentary Group on Arts, Health and Wellbeing (APPGAHW) という超党派議員連盟を組織して政策に対して最新の動向を聞き議論を交わすような場所も設けています。

まとめに入ります。英国の Arts in Health のキーワードとして、エビデンスベースド、チャレンジが挙げられると思います。

まずエビデンスベースドですが、アートが医療に与える影響を測定することで、保健省にも認知され、病

院にも広く浸透していると感じました。そしてチャレンジ精神が、アートの多様性を育み、政治的な働きかけも含め日々努力されていることが分かりました。

また、Arts in Health 組織の役割に注目すると、病院のアートプログラムを運営、アートによる環境整備、メンテナンス、アーティストや美術館と病院とのかけはし、広報活動などをおこなっているほか、研究・開発活動、組織運営という側面も持っていました。

日本においてまず必要と思われるのは実践を重ねること。2 つ目に人材を育てる環境が重要だと思います。またエビデンスの蓄積ですが、筑波大学などでは調査なども盛んにされ、エビデンスも徐々に出てきつつあります。我々もワークショップなどをやりながらエビデンスを取っていったらと思います。何年後かには「病院にアートは必要不可欠」と、多くの方が思ってくださいといいですね。以上で話を終わります。



Great Ormond Street Hospital for Children 渡り廊下のアート、Royal London Hospital エントランス待合

この記事は 2018 年 6 月に開催されたシンポジウムにおける高野氏による講演「英国のチャリティー組織の役割」と、日本建築学会計画系論文集 84 巻 (2019) 755 号 p.87-96 に掲載された論文 高野、阿部、鈴木著「英国の病院の Arts in Health の概念と活動組織に関する研究 ロンドンの先進的な 3 病院の事例から」をもとに再編集しました。

- 2018 シンポジウム概要**
「ヘルスケア・アートマネジメントってなんだ？」
2018 年 6 月 23 日 (土) 13:30 ~
名古屋市立大学北千種キャンパス図書館上 大ホール
・大学におけるアートマネジメント (加藤 敬氏)
・療養環境におけるアートの役割と可能性 (森口 ゆたか氏)
・英国のチャリティー組織の役割 (高野 真悟氏)
・NPO 法人子ども健康フォーラムによる療養環境整備 (篠原 佳則氏)
・ディスカッション

アートで もっと 療養環境を元気に!!

なごやヘルスケア・アートマネジメント 推進プロジェクトとは

「文化庁 大学における文化芸術推進事業」に名古屋市立大学から応募して
いました「未来につなぐヘルスケア・アートマネジメント人材育成事業 -医療
福祉施設の環境向上を支援する名古屋モデルの全国発信を目指して-」が
採択されました。

この事業では、社会的包摂の視点から、医療福祉施設などヘルスケアの現
場におけるアートの必要性・有用性の啓発とともに、そのアートマネジメン
トのできる人材育成や組織構築の基盤づくりをしていきます。医療系・人文
社会系・芸術工学系を擁する名古屋市立大学の人材と、20年以上にわたる
芸術工学部でのホスピタルアートの実績を活かし、幅広く名古屋市関連機関・
NPO 等と連携し、アートによる医療福祉環境の向上を目指します。

なごやヘルスケア・アートマネジメント推進プロジェクト実行委員長
名古屋市立大学大学院 芸術工学研究科 教授
鈴木 賢一

なごやヘルスケア・アートマネジメント 推進プロジェクト事務局

〒464-0083 名古屋市千種区北千種 2-1-10
名古屋市立大学北千種キャンパス内
healthcare_art@sda.nagoya-cu.ac.jp
<https://healthcare-art.net>



大学から



2019年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業
未来につなぐヘルスケア・アートマネジメント人材育成事業
医療福祉施設の環境向上を支援する名古屋モデルの全国発信を目指して

